

あを 10

2018





長月

山

方

竹馬や

は

に

ほ

あ
り
あ
り
に

入

と

万
太郎

格子柄江戸小紋

あそ

十月



鳥のそば

うぶすなの春の小川は音もせず
かへりみる日向の水に浮くらムネ
日の盛背黒鵲鵲弾みゆく
夜に入り赤くなりたる夏の月
新涼や鳥が鳥のそばにゆき

東京

佐藤 喜孝

八月や

平成を惜しむ短冊星まつり
名画座で過ごす八月十五日
離れ住む妹ひとり夏畑
洗ふほど涼しくなりぬ織紉
短夜や「アレクサ」に問ふ「いまなんじ」

埼玉

須賀 敏子

東京

田中 藤穂

火星燃ゆ

接近の火星くつきり闇暑し
常山木散る駅の石段白い雲
九十年見しさまざまや敗戦忌
鴉二羽屋根にて喘ぐ暑さかな
七夕の阿佐ヶ谷商店街人出

三重

長崎 桂子

冷まし

町外れ夏の野の花馨しき
登り来て噎せる香に満つ花茨
冷ましや庭の鉢植茶褐色
嵐去る歩道の山積み冷ましき
宵闇に風出でしより冷ましき

東京

森 なほ子

星祭

七夕は商店街に元気なり
鍼灸も漫画喫茶も星祭
七夕をぎつしり詰めてアークード
風に雨気七夕飾りさざめける
短夜や壁の向かうにベル止まず

東京

赤座 典子

振り飴

秋の蜂二声づつの此処彼処
とりどりの秋果に迷ふ道の駅
薄紅の芋茎をまづは小鉢にて
墓詣孫はカメラに目を瞞る
稲妻のきらりと消える振り飴

猛暑

埼玉

秋川 泉

送り火や燃えて暫しの黙のあり
酷暑の日猫が鼠を仕留めをり
熱風や金文字並ぶ祖父の書庫
踏まれたか平になりし秋扇
猛暑の日打ち上げられし鯨の子

東京

石森 理和

湯布院

湯布院へ転勤の報せ残暑見舞
朝まだき紋白蝶のふはふはと
保冷剤首に巻き付け熱波避く
山藤の頼りて登りゆらゆらり
今年竹ずんずんと我ひとり

埼玉

大日向幸江

さつま蒭

名は風雅秋立つ朝に生まれけり
澁刺と百才の日々雲の峰
納豆とモロヘイヤ有る夏ご飯
倅せはホックリさつま蒭の味
行き場なき怒りを捨てに大花野

東京

七郎衛門吉保

灼熱

瀬の温み不戦の鮎の不漁かな
灼熱に蟻も速歩のアスファルト
命果てなぜ仰向けの油蟬
新涼や掘り起こしたる
保育園男の子も姫も甚平着

葉山

東京

篠田 純子

葉山の道ビキニのひとの笑ふこゑ
日焼けして帰りのバスの砂ざらざら
ガタンギシン車輛連結秋暑し
恋神籤に嬌声沸くや今日の菊
桜桃忌鳶の翼の五指の見ゆ

石川

定梶じょう

青柚子

狛犬やあまりに暑く畏る
奮起せよ朝一湧いて雲の峰
啞蟬も少し声出す蟬しぐれ
道灼けていや遠長し齒科通ひ
青柚子や挽ぐ指先に全神経

八月号作品より

秋川泉・森なほ子

白雨や東海道の一里塚

佐藤 喜孝

江戸時代、徳川家康が秀忠に命じ設定したのが始まりの一里塚。この句から歌川広重の東海道五十三次の浮世絵を思いました。古の人々が往来した街道に夕立が。今も昔も人々は大急ぎで激しく降る雨に追われて雨宿りを。

想像の世界に誘われしばし心を遊ばせました。

(泉)

梅雨の朝窓辺に小さき濡れ雀

篠田 純子

何とこまやかな情を感じる句でしょう。雀は雨宿りをして窓辺に姿を見せたのでしょうか。濡れた雀に心を寄せている作者の思いが伝わって来ます。

(泉)

諦めるやうなり烏賊火払暁は

定梶じょう

一晚中沖で輝いていた烏賊釣火、夜が白んでくると一つまた一つと消えてゆく。そのさまは何かを諦めていくように見える。朝には漁を終わり港に帰るのは当然ですが、それを諦めるようということ、烏賊火を見たことのない私にも寂しさと情感が感じられるのでしょうか。(なほ子)

挿し芽して五十年余の額の花

須賀 敏子

こんもりと茂って大きな花をつけているあじさい、考えてみると自分で挿し芽したもので、かれこれ五十年以上もたっている。作者の人生の大半を傍らで見守っていたのですね。感傷的な言葉は何もなく、淡々と述べているだけです、深い思いが伝わってきます。(なほ子)

薄幸の幼女のノート梅雨しとど

田中 藤穂

大きなニュースになった、あの虐待死させられた五才の女の子。その子の残したノートは涙なしには読めませんでした。作者はそのショックを一句に留めずにはおられなかったのでしょうか。「梅雨しとど」は日本中の涙でもありました。(なほ子)

真白に微笑むや十葉の花

長崎 桂子

ドクダミは日陰の湿った場所を好む野草。ほの暗い木立の下などに咲く花の白さには、はっとさせられます。ドクダミは素晴らしい薬効もあり、独特な香気があります。(泉)

梅雨空にビルの先端融け込める

森 なほ子

一九六三年、百尺規制が廃止されてから超高層ビルが建設される様になりました。雨に烟る高いビル

ね。(なほ子)

梅雨に入る歩道に傾斜あるを知る

石森 理和

雨の日、ちよつとした段差や傾斜が足元を危うくしたりしてハツとする事があります。ふだん何気無く歩む道もそれ故梅雨に入ればより注意して……：……となりませぬ。作者のやさしいお人柄を感じます。(泉)

鈴虫の食べる煮干を品定め

大日向幸江

リーン、リーンと綺麗な声で鳴く鈴虫。食性は雑食性。その飼育に煮干を与えるのですね。翅をこすり合わせて鳴くのはオス。しかし交尾後、そのオスをたんぱく質が必要になるメスは食べて産卵に備えます。鈴虫を飼育されている作者ならばこそその一句です。(泉)

は、見上げて雲の中。その高層ビルを見上げる作者と梅雨空。もうそこは天空なのです。天空と地上、とても広がりを感じる句と思いました。(泉)

十室の宿に大甕黒目高

赤座 典子

僅か十室のみの宿、さぞ隅々まで気配りが行き届いていることでしょう。そんな宿の入り口あたりか、大きな甕が置いてあるので、覗いてみると目高がスイスイと。勿論水草も。これぞ涼しさのおもてなし。そんなお宿に泊まってみたい……。(なほ子)

一の市一番重い西瓜買ふ

秋川 泉

一の市とは、この句では一のつく日のスーパーの特売日とのこと。その日、売り場で一番重い西瓜を買った作者、何があったのでしょうか？一のリフレインで口調良く、弾んだ気持ち伝わります。ずっしり重い西瓜はきつと甘く美味しかったことでしょう

万緑に宇宙遊泳ペアリフト

七郎衛門吉保

スキー場のリフト、夏も動かして観光客を楽しませています。「ペアリフト」の語に注目!!さすが仲間睦ましい。ご夫婦、宇宙遊泳も並んでたのしまれました。万緑の中を登ってゆく気持ちよさを満喫されたことでしょう。(なほ子)



水底の水きらきらとわらはやみ 佐藤喜孝

シーソーも松の根っこも夏休み 定梶じょう

道炎ゆる句会は銀座一丁目 須賀敏子

つまづきし手足の痛み朝曇 田中藤穂

雨上り電動三輪車半ズボン 長崎桂子

干し草の匂の茅の輪くぐりけり 森なほ子

胴長な小玉西瓜の車切り 赤座典子

野仏を描きし画家は夏至生れ 秋川 泉

同じ丈育つ青田に白鷺居る 石森理和

夏風邪や猫を抱へて臥せてをり 大日向幸江

台風が左旋回する異変 七郎衛門吉保

台風12号東京湾19水門閉鎖 篠田純子

喜孝抄





佐藤喜孝

秋川 泉

銀座裏迷路のすみに地虫鳴く
隣家より籠ごと来たる轡虫
黒猫の見据ゑし先に鉦叩

一句目。わからないが銀座裏とてそんなに静かではないと思ふ。心がけが良くなければそんなところで地虫の鳴き声に気づくことはないだらう。さすが野鳥の会の会員。自然への観察眼は鋭い。華やかな街の裏側にある自然。

二句目。籠ごといただいた轡虫といふ句意。それだけでは勿体ない。よい機会を逃さぬやう、掲句をきつかけに作句はこれからが本番。轡虫がどうした。餌がなんだ、鳴き方は、こんな事もあつた、といふことを併句にした

い。序章で終はるのは勿体ない。わたしも轡虫をゆつくりと見聞きしてみたいものだ。

三句目。小さな鉦叩。何十年も棲み着いてゐた我が家の鉦叩、数年前から聞かなくなつた。勿論姿など見たこともない。黒猫がじつと鉦叩を見てゐる。この先どうなるか作者も緊張してゐるやうだ。前句と同じく、物語が始まる前に、筆を止めてしまった気がする。

長崎 桂子

迷走の颱風来恐ろし三時間
豪雨炎暑生きる工夫の今日暮るる
地蔵盆幼いはしゃぐ思ひ出す

気がはやつて寸詰まりのやうな句姿になつてしまつた。間違へてゐるかも知れぬが元句に添ひつつ「恐ろしや迷走台風三時間」

二句目。あれやこれやさまざまに工夫して豪雨から、炎暑から生活を守る。今夏の沖繩から北海道まで味わつた自然の猛威である。今日暮るる。一段落、息をつ

くが、夜は夜で油断のできぬ今年であつた。

三句目。まことに残念ながら地蔵盆を知らない。わが町では地蔵さんも道祖神も見かけない。地蔵盆の仕方も大規模なものから町内の手作りのやうなものまでさまざまなやうだ。掲句、中七少し難解。七字では言い切れないことなのかも知れぬ。地蔵盆で幼い子がはしゃぐのを見てゐて自分の昔を思ひ出してゐる句かと。「地蔵盆はしゃぐ幼はわたしかも」。作者の句意に添つてゐるかあやぶんでゐる。

篠田 純子

お平らに夏座布団をすすめけり
蓮葉のきほひ蕾を押しゐたり
緋袴の硬き結び目今日の菊

一句目。さあ困つた。どう受けとめればよいのか。お平らに、といふ言葉をなつかしいと思つたが……

二句目。蓮池を前にすると、大きな葉が目につく。葉の中央にしるがねの水滴が揺れてゐるなんぞは見あきな

定権じよう

なゐあとの蜘蛛は考ふ巢の中
遠ざかりながら滝音懐かしむ
拾ひ来し蟬の殻なり置きどころ

三句目。巫女さんの緋袴姿。この日は特にきりつと粧つてゐるやうに見える。「今日の菊」は菊の節句の菊。重陽の節句がどう祝はれるのか見聞きしたことがない。この句によれば神社でも爲されるやうだ。にはやかな句である。

一句目。「も中」は「最中」であらう。女郎蜘蛛はよく巢の中央にじつとしてゐるのをみかける。地震の揺れを餌がかかったかと思つて探したが見当たらない。などとすこし下世話な解釈をしてしまつては台無し。餌のかかるのを日がな一日じつとしてゐる姿はたしかに何かを

考へてゐるのだらう。禅僧のやうに無念無想では蜘蛛はないらしい。

二句目。深山幽谷の人里離れ滝。わたしの知つてゐる滝でいへば尾瀬の三条の滝。作者もやつと目的の滝に着いた。滝音に包まれて十二分に堪能し、帰路につく。そのときの作者の心情が的確に読者に伝はる。「懐かしむ」はわたしには云へぬ。三嘆した。

三句目。わたしもよく拾ひものをする。山歩きをしてゐた頃は山頂の石を拾つて山の名と日付を書いて箱にしまつて置いた。あの箱は何処にあるのだらう。蟬殻、蠟螂の卵、蝶の蛹など見付けるとつひ手を出してゐる。じょうさんも蟬の殻を持ち帰つたのは良いが、さてと処置に困つてゐる様子が伝はる。

井上 石動

糸のころと猫じゃれてをり笑へ得り
蚯蚓鳴く合はせて耳も鳴りけらし
傘合羽リュックの肥やし旅の秋

姉に聞く父母のいろいろ墓洗ふ
去年より丈を長めにサンドレス
流木が吊橋壊し八月尽

一句目。今は墓の下にゐる父や母のことを姉はよく知つてゐる。些末なことも姉の口から聞くと新鮮な思ひで心に止める。両親・姉そしてわたしとかけがへの無い家族、忘れてはいけないこと、忘れたくないことをあらためて思ひ起こしながら墓を洗つてゐる。

二句目。流行に合はせてドレスの丈を長めにするわけではない。失礼だが寄る年波の事を考へてのこと。いひたいことをものに託す、俳句の大切な表現方法をさりげなく実行してゐる。

三句目。此の句も前句と同じく、嵐の激しさを流木に託して表現してゐる。嵐の激しさを伝へながらも、このやうな大事も時といふ大河に飲み込まれてゆく。「八月尽」がそのやうな作者の感慨を教へてくれる。

森 なほ子

八月やその日とその日黒く塗れ

一句目。「糸のころ」は糸のころ草の略。ねこじやらしとも。石動さんは言葉のをかしみに興を示す。ねこじやらしに猫がじゃれてゐる、言葉通りのことを目の当たりにして可笑しく思つてゐるのであらふ。

二句目。耳鳴りと蟬の声とを詠んだ句は数多ある。一例を

耳鳴りに似て初蟬のはるかにも 小川匠太郎
蟬しぐれ耳鳴りしぐれ昼ふかし 金子 兜太
天主堂近み松蟬か耳鳴りか 井上 信子
空蟬に憑かれてよりの耳鳴りか 豊田 都峰
蟬しぐれなかのひとつにわが耳鳴り 芝 尚子
蚯蚓と耳鳴りの句は少ない。
耳鳴りを疑ふほどに蚯蚓鳴く 橋本 修平
珍しいところでは「蚊」。

耳鳴りか叩きそこねし春の蚊か 林 翔
三句目。晴天の旅であつたよし。用意万端調へた雨具も宝の持ち腐れ。秋の旅の報告句。

須賀 敏子

炎天の道の焦げゆくデジャヴかな
炎天とめどなし兜太無き熊谷

一句目。

八月の六日・九日・十五日 中村洋子 風土
八月や六日九日十五日 谷岡尚美 槐
八月や六日九日十五日 近藤ともひろ るんど
八月や六日・九日・十五日 豎山道助 風土
このやうに多くの人が八月のこの三日は逃げられぬ特別な日。掲句は何日といはず、その日とその日」とある。カレンダーにであらうか、黒く塗れと決意してゐる。命じてゐるのかも知れぬが。その日とその日」といふ二日は先刻分かつてゐるといふ前提の句。とつおいつ頭を巡らせたが落ち所の少しゆるる句に思へた。

二句目。この句から

君が行く道の長路を繰り畳ね焼き亡ぼさむ天の火も
がも

が浮かんだ。万葉集の狭野茅上娘子の歌。

道が焦げるやうな炎天下でふつと作者はある既視感に

陥つてゐる。わたしもいつかその既視感の中にあるやうに、戦後間もない道に立つてゐた。

三句目。兜太は熊谷の名誉市民であつた。熊谷は特に暑い町と連想してしまふ。“炎天とめどなし”である。作者と兜太のかかはりをお尋ねしたことはないが、兜太の俳句界を牽引してきたエネルギーな人生はとめどない炎天の熊谷で育てられたのではと追悼されてゐる。

俳句総合誌で

おおかみに螢が一つ付いていた

を読んだときなんと美しい俳句だと思つた。ある出版社から「俳句は○○のようなもの」といふアンケートハガキが同封されてきた。「意識が生んだ言語生命体」と書き返送した。

田中藤穂

暑に負けぬゑのころ草も蚊帳吊草も

つぎはぎの夢に弟焼きもろこし

猛暑去る芋の広葉に雨の音

一句目。糸のころ草も蚊帳吊草も美しい雑草。この頃から夏から秋にかけて会ふなつかしい草だ。たまには手折り遊んだこともある。今年の極め付きの猛暑の中、これらの草々は夏負け知らずである。そんな草を眺めてみると草ばかりでなく作者をも力づけて貰つた。

二句目。寝苦しい熱帯夜。眠りも浅く覚めては眠るの繰り返しかへし。夢もつぎはぎになってしまふ。継ぎ接ぎだが同じやうな夢なのである。きつとこどもの頃の夢であらふ。会ふことの叶はぬやうになつた弟と食べた焼き玉蜀黍。覚めてまた夢を回想する作者である。

三句目。前二句を承けてのこの句、一段と涼しさを覚える。音の無きかに降る雨も芋の葉に当たると大きな音を立てる。芋の葉全体が振動して音を増幅するのかしら。風鈴は耳だけで涼しくならうとするが、芋の葉の雨音ははだへにも涼感を感じた。

赤座 典子

猛暑台風猛暑台風地震までも

鴉鳴くや我が街に見ゆオスブレイ

新涼や集ひて競ふアジア人

一句目。この夏に起きた自然の猛威を確りリフレインして読むものもさうだ、さうだと頷く。“地震までも”とおまけ付きである。“なぬ”と五音にするために読ませたのだが、“じしんまで”と“も”を取り“じしん”と読ませた。意味は同じだが力感が違ふ。

二句目。つひに典子さんは鴉になった。

沖繩に次いで横田にもオスブレイが配備された。日本の地面や空での出来事だが日本は何も言へない。典子さんの住宅からオスブレイの飛行が見えるらしい。沖繩でもさうだが何も言へぬ状態はお上には都合がよいのだから。汚い、危ない仕事は全てアメリカの勢にすればと策略を巡らしてゐるのだらう。さうでなければ独立国としての対面を捨ててまですることではない。オスブレイ配備一つにしても分からぬ事が多い。

典子さんは鴉になられた。

三句目。淡淡と事柄を述べてゐながら確り作者の意志を伝える句作りがある。此の句は残念ながら事柄に任せすぎた。

大日向幸江

青空に両手を広げ女郎花
おいおいね舌足らずだよ栗ご飯
新蕎麦や雨降る村を訪ねたり

一句目。女郎花に“両手を広げ”のイメージはない。広々とした花野でのびのびと両手を広げてゐる人を想つた。日常の憂さを吹き飛ばすやうに。

二句目。朝一の頭を絞つたが意だけ先走りして舌足らずな出来上がりになつてしまつた。

三句目。“村”といつても行政区画の“村”ではない。ビルとコンクリで出来た街ではない村、新蕎麦をいただくためにそんな自然溢るる村に出かけた。雨を嫌ふ人もゐるがほどほどの雨は結構なものです。心落ち着く雨は蕎麦の味を一段と引き立てたことでせう。

七郎衛門吉保

八月の反戦ドラマ「花へんろ」
覚悟して見る番組や原爆忌
広島忌首領の言の葉白々し

一句目。ドラマ「花へんろ」知らなかったので「ウキペディア」より

『花へんろ』は、早坂暁作のテレビドラマシリーズである。『花へんろ 風の昭和日記』と題し、NHK総合テレビ「ドラマ人間模様」で昭和60年、昭和61年および昭和63年に連続ドラマ3部作が放送された。作者自身の体験をもとに、大正から昭和にかけて四国の遍路道に立つ商家の生きごころを描く。第4回（昭和61年）向田邦子賞受賞作。

わたしだけ知らないのかも知れない。句に戻る。ドラマは反戦ドラマと。わたしも「この世界の片隅で」と「風」を見た。静かで激しいドラマであった。偶然「花へんろ」が放映されたので録画した。どの部分か放映されたのか分からぬが覚悟してみよう。

二句目。戦争と云ふリングの外に無防備な人々を標的にした原爆や空襲は理屈は兎に角理不尽だ。わたしも空襲に遭はねば曲り生活と云ふ子供心にも……。本当に覚悟しなければ見る事の出来ぬ番組がある。恥をさらすとわたしはだうも覚悟が出来ぬ質である。

三句目。「じゅりよう」と読ませるのか、「ドン」と読

ませるのか。どちらにせよ「言の葉」は作者の思ひやりか。三句とも俳句としては難しいが気持ちは良く分かる。

石森 理和

蒸し暑き 大気に虫の薄化粧
趣の 青竹筒に水羊羹
螢草ガス灯 一台庭に立つ

一句目。「虫の薄化粧」は作者らしいもの云ひだが、ここでは大づかみな表現が生きない。具体的な虫の名前が欲しいところ。昆虫をはじめ蝸蝸なども虫。具体的に虫の名を示せば芯が定まり佳句の句がしてくる。

二句目。こちらは前句と違ひ明快である。「青竹筒に水羊羹」に趣があるので「趣」は屋上屋。

三句目。庭の趣が分かる。瓦斯灯のある庭とは庶民の庭ではない。庭園公園のやうな広いお庭ではないか。そんなお庭に瓦斯灯が一台立つてゐる。話だけが、電燈より優しい明かりのやうな気がする。瓦斯灯の中に雑草の一つである螢草が浮かんでゐるのは魅力的。

あをキーワード俳句辞典（はあーはお）

ばあさん

ばあさんの 駆込み乗車酷暑の日 篠田 純子
秩父山ムツばあさんの花の春 秋川 泉

バーテン

バーテンの 機敏な仕事秋初め 篠田 純子
バードウイーク 預かってゐる長梯子 中川 句寿夫

バイオリズム 掴みきれずに秋暮るる 赤座 典子
バイオリン 無伴奏曲五月の夜 田中 藤穂

バイオリン 奏でるしらべ春の海 長崎 桂子
バイオレット 夏ぐれやバイオレットの雨コート 山莊 慶子

バイク 九輪草マウンテンバイク行き去りぬ 須賀 敏子
逃水へ少年バイク 駆りてゆく 鈴木多枝子

青年はバイクで 遍路秋初め 長崎 桂子
オレンジのバイク 去りゆく冬道 山莊 慶子

朧夜のバイクを ふかす同じ刻 長崎 桂子
バイク 駆り破戒僧めく夏衣 竹内 弘子

バイク屋の軒先 つたふ青葡萄 山莊 慶子
子供の日耳を 劈くバイク音 山莊 慶子

嘯りや青年バイク ぴかぴかに 須賀 敏子
バイク二つ番のやうに 春夕べ 森 なほ子
売店 梅活けて売店で 売る水戸納豆 田中 藤穂

バイバイ 母にバイバイエレベーターのドア 余寒 篠田 純子
夏めくやまだ歯の生えぬ子のバイバイ 大日向 幸江

パイプ 積みあげしパイプ机に 春驟雨 鎌倉喜久恵
讚美歌とパイプオルガン 背を正す 須賀 敏子

遺品この海泡石のパイプかな 定梶 じょう
山水をパイプで 引いて芹豊か 大日向 幸江

羽音 秋燕の羽音 するどき濁り川 渡辺 友七
新緑の境内 よぎる羽音 澄む 渡邊 友七

何鳥か 羽音残して 梅散らす 森山 のりこ
掠め飛ぶ 鶯の羽音や 額の花 石森 理和

秋の雨 遠退く 鴉の羽音かな 佐藤 恭子
花蛇の主 張はげしき 羽音なり 早崎 泰江

羽音たて 烏 往き交ふ 彼岸かな 斉藤 裕子
羽音する 枕元 なり蚊をピシヤリ 黒澤 佳子

あとがき

シンプルな内容だが十月号、月の半ばに発行できた。定稿しようさんに原稿依頼したところ早速送って頂けた。惜しいが来月号に回しなんとか発行の目処を立てた。落着く着いたらあらためて原稿のお願ひをさせて頂きます。

「あを」キーワード俳句辞典、**は**の次は**は**・**は**と進まなければならぬところ、濁音半濁音を忘れてゐた。順序が狂ってしまった。ご容赦を。

「はじだて集」は人様の句に言葉を添へる。何回やっても慣れぬ。評文のなかで個人名を書いたと思ふと隣には作者といつてゐる。全く統一の取れぬ事。定稿しようさんの評文を読み返すと、的確な添削が多い、いはれた作者よりそれを読んだほかの人が納得することが多い、のではないかとふと思った。

九月二十八日、総武線中野駅から阿佐ヶ谷駅へ向かった。のんびり自転車を漕いでゐると高田寺の手前で真向かいに

夕日が落ちかかつてゐるのに出くはした。大きなお日様でまぶしいが、太陽向かつて漕ぐのが楽しくなった。帰りは青梅街道を走った。少し見上げた位置に大きな、本当に大きな月が浮かんでゐた。雲がよい案配にかかつてゐていいお月見を自転車の上でした。句会でその話をしたら居待ち月と教へられた。あの月に失礼にならぬ名句を作りたいなあ。(喜孝)

二〇一八年十月号

発行日 十月十一日
発行所 東京都中野区中央2-50-3
電話 090-98228-4244
ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402
佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)